

キャリア教育イベントの実践における教育効果の検証 「子どもが作る町・ミニたまゆり」の事例研究

ばんしょうかずまさ ののみやこうた
番匠一雅 二宮幸太

〈要 旨〉

筆者が所属する田園調布学園大学（川崎市麻生区）では、5才から15才までの子どもたちが“遊びを通して働く”体験をしながら子どもたちだけの仮想の“まちづくり”をする「ミニたまゆり」という取り組みを行っている。今年度で7回目を迎え毎年2日間で延べ2,000人以上の地域の子どもたち・地域住民・学生・教職員が参加をしている。本取り組みには人間福祉学部1年生の必修科目である「福祉マインド実践講座」のプログラムの一環で約200名の学生がボランティアスタッフとしての参加が義務付けられている。本稿では、「ミニたまゆり」という、大学と地域とが連携した特色的な教育プログラムを実施することによる、学生や子ども達の教育活動および大学の地域貢献活動の可能性について事例報告をする。

〈キーワード〉

ミニたまゆり 田園調布学園大学 キャリア教育 ミニシティ 地域貢献

1. はじめに

これまで大学のミッションは教育と研究を重点に置いた「教育研究機関」であるという認識が一般的であった。しかし近年になり、大学のミッションである教育・研究と並んで、第3のミッションとして「社会貢献」の重要性が強調されるようになってきている。しかし、天野郁夫は「外側の活動にかまけて教育研究活動をおざなりにしている」という批判をしている。

平成17年1月に出された中央教育審議会の答申「我が国の高等教育の将来像」でも、このことについて次のように述べている（文部科学省2005）。

大学は教育と研究を本来的な使命としているが、同時に、大学に期待される役割も変化しつつあり、現在においては、大学の社会貢献（地域社会・経済社会・国際社

会等、広い意味での社会全体の発展への寄与)の重要性が強調されるようになってきている。当然のことながら、教育や研究それ自体が長期的観点からの社会貢献であるが、近年では、国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、より直接的な貢献も求められるようになっており、こうした社会貢献の役割を、言わば大学の「第三の使命」としてとらえていくべき時代となっているものと考えられる。

このような新しい時代にふさわしい大学の位置付け・役割を踏まえれば、各大学が教育や研究等のどのような使命・役割に重点を置く場合であっても、教育・研究機能の拡張 (extension) としての大学開放の一層の推進等の生涯学習機能や地域社会・経済社会との連携も常に視野に入れていくことが重要である。

大学は地域にとって知的、人的資源であり、地域に貢献する人材を育成、供給することにより、地域の発展にとって重要な存在である。また、大学と地域との関係性は大学から地域への一方的なものではなく、地域連携を通じて、地域にとっては大学の知的、人的資源が、大学にとっては教育・研究の一環として地域を有効活用するなど地域にも大学にも両者にメリットがある WIN-WIN の関係が理想的である。さらに教育・研究の場としての地域連携活動に学生を参画させていくことで、学生はその活動を通じて社会や地域との関わりの中から多くのことを学ぶことができる。また近年、18歳人口の減少により大学も淘汰される時代に突入し大学間競争も激化している。今後より一層、各大学が他の大学にはない特色のある教育を提供し差別化を図る必要がある。そこで本稿では、大学の社会貢献・地域連携に学おいて、学生の教育的効果に着目し、田園調布学園大学 (以下、田調大) で行われている「子どもが作る町・ミニたまゆり」における可能性について検証することを目的とする。また、第2の目的として、これらの社会貢献活動がもたらす、地域住民の大学に対するイメージの変化や参加児童に対するキャリア教育的効果についても、分析を行い報告するものとする。

2. 子どもがつくるまち「ミニたまゆり」の概要

1. 「ミニたまゆり」とは

「ミニたまゆり」とは、大学内に作られた仮想の町の中で子どもたちが主役となり「労働」を体験し、「給料」を得て、「税金」を納め、お金を消費するという一連の体験を通じて、町の営みを疑似体験するイベントであり、参加する子どもたちは、これらの体験を通じて、社会の様々な仕組みを楽しみながら学ぶ事ができる。

ミニたまゆりに参加できるのは、小学生から中学生 (5 ~ 15 歳) となり、家族以外か

ら自分の労働に対する対価を受け取るという体験は初めとなる場合が多い。子どもたちは、ミニたまゆりの体験を通じて、保護者から与えられるお金と、自分が働いて得たお金の尊さが異なること。しいては、お金の大切さ、ありがたさ、お金を稼ぐ両親への感謝の気持ち。限りあるお金を有効に消費するための工夫。納税の必要性和、使われ方についての理解など、お金にまつわる経済感覚を理解することができる。

また、子ども会議と呼ばれる町づくりのイベントや町の生活を通じて、『町の秩序を保つために皆がルールを守らなければならない』『町のルールや町の仕組みを考え、自分たちで町の暮らしを改善できるという事』、『5才～15才という年齢・性別・価値観・知能の異なる、異世代交流の難しさと重要性』などに気づくことができる。

これらの体験は、高校生にもなると誰もが自然と経験し体得するものであるが、ミニたまゆりは、これらの経験を、小学生のうちから体験することができるイベントであり、これらの体験を楽しみながら、いつの間にか身につけることができる素晴らしい教材だと位置付けている。また、町の運営には、様々な仕事に従事する子どもたちが協力し合う必要がある。他者との連携・協力・相互扶助という経験により、社会性の醸成につながると考えられる。

「ミニたまゆり」の名称の由来は、大学が位置する多摩地区の「たま」と、大学所在地の「百合丘」の「ゆり」をつなぎ合わせたものである。

2. 「ミニたまゆり」の成り立ち

ミニたまゆりの始まりは当時の田調大の教員であった酒井一郎がゼミナールの延長として、2005年11月に学園祭のイベントとして2日間開催したのが始まりである。酒井一郎は田調大に在籍中の2005年2月、東京都内で開かれた「子どもの参画情報センター」主催の研修例会に参加し、そこで1979年の国際児童年にドイツのミュンヘン市ではじめて開催された、ミニ・ミュンヘンという「子どもたちが遊びを通じて職業体験をしながらまちづくりをする、子どもたちが主役のバーチャル都市」の活動を知り、ミニ・ミュンヘンの「子どもたちが遊びを通して社会とのつながりを体得するホリスティック（包括的）」な仕組みに深い感銘を受けた。酒井一郎は2005年春、自分が勤務する田調大でもやってみようと思いついた。先行する各地の「子どものまち」は市民グループによるものが多く、大学がつくる「子どものまち」は初めてであった。

また田調大は、学則の第1条において、「捨我精進の精神と人間尊重を基調とし、時代の要請に対応できる柔軟な思考力と行動力のある人間性豊かな人材を育成し、もって地域社会・国際社会の福祉に貢献することを目的とする。」と規定し、これからの福祉を担う人材育成を教育目的としている。近年、少子化傾向にある我が国の社会の発展のため

には活力ある青少年の育成が緊急の課題であり、地域の教育機関である大学には社会貢献活動としてこの課題に積極的に取り組む使命があるという背景も併せて、「子どもの町」の活動を大学で展開する事で参加する子ども達だけではなく、学生への教育効果が期待できると考えるようになった。

3. ミニたまゆりの仕組み

「ミニたまゆり」に参加する子どもたちは、まず受付で「市民カード」を受け取り、町の仕組みについてレクチャーを受ける。その後、職業案内所に行き、やりたい仕事を選ぶ。例えば、町には市役所、銀行などの公共施設、様々な製品を制作する工場や食事を提供するお店、ボーリングや射的などのゲームを楽しむ娯楽施設などで70以上ものお店や仕事を用意されている。職業案内所には、求人の人数に応じた「お仕事カード」が用意されており、子どもたちはその中からやりたい仕事を選ぶ。お仕事カードを受け取ると子どもたちは指定の店舗に移動し、学生スタッフに「お仕事カード」を手渡し、「市民カード」に開始時間を記入してもらってから仕事を開始する（各店舗では田調大の学生が子どもたちのサポートをする）。子どもたちは仕事を辞めなくなったら、市民カードに終了時間を書いてもらい、銀行で給料を受け取る。銀行では、市民カードに書かれている労働時間を元に「ミニたまゆり」の通貨「ユリー」を支払う。時給は、一律8ユリーである。銀行の横には、税務署があり、そこで、所得の半分を税金として納税する。残りの4ユリーは自分の好きなように使うことができる。

表1 第6回 ミニたまゆりの概要

開催期間	平成23年2月12日(土)・13日(日)
開催時間	10:00～16:00
場 所	田園調布学園大学 3・4・5号館
対象年齢	5～15歳（小学校未就学児は付添いが必要）
参加費用	300円（二日間有効）
来場者数	のべ2,000人

4. 福祉マインド実践講座の概要

第1回ミニたまゆりでは、運営スタッフとして数人の教員とそのゼミ生がボランティアで参加していたが、回を重ねるごとにイベントの規模が大きくなり、有志のボランティア学生だけでは運営が困難になってきた。そこで、人間福祉学部の必修科目として設置された「福祉マインド実践講座」の履修条件としてミニたまゆりの参加を義務付け、現在では人間福祉学部1年生全員がミニたまゆりに参加する事でイベントを運営している。

「福祉マインド実践講座」の目的は、これから社会福祉を広く学ぶ学生に対する具体的

かつ実践的な「福祉マインド」を醸成するための導入教育である。さまざまな形態による地域貢献活動への参加を通じて、「地域社会に深く根ざした大学」に通う学生としての自覚と責任感を持ち、さらには「他者との連帯」や「我欲・利己を捨てて奉仕する心」といった、福祉を学ぶ者としての重要な資質を早期に身につけることをねらいとしている。

この授業は地域貢献活動への参加（準備、実践、振り返りなど）を通じて福祉を実践的に学ぶことを目的としている。学生が参加する地域貢献活動は主に「イベント型（単発型）」と「ボランティア型（継続型）」とに分類され、双方の活動への積極的な参加が求められる。

【イベント型（単発型）】

「赤い羽根共同募金（10月～12月）」、「宮前ふれあいフェスタ（5月、日曜日）」、「麻生ふくし祭り（9月）」、「えいぶるコンサート（10月）」、「ミニたまゆり（2月頃）」、「川崎フロンターレ観戦サポート（5月・10月）」、麻生区・宮前区の地区社会福祉協議会などのイベント活動への参加

【ボランティア型（継続型）】

「本学に依頼が来ている各種のボランティア」、「各教員が推薦する学外（ボランティア）活動」、「DCU 地域パソコンクラブ：高齢者のためのパソコン教室の学生スタッフ（各週土曜日）」、「ミニたまゆり子ども会議（年間5回程度）」、麻生区・宮前区の地区社会福祉協議会などの活動（ふれあいサロン、など）への継続参加

5. 第6回 ミニたまゆり 運営組織について

ミニたまゆりを開催するに当たり本学の学生及び教職員だけではなく、参加する子どもたちや地域住民を組織化し、更には地域の高校や企業、各行政機関と連携しそれらを含めた「ミニたまゆり運営組織」を構築している。

イベント当日には地域住民のボランティアスタッフや社会福祉法人はぐるまの会、麻生総合高校などがイベント運営に携わる。これにより子どものまちでは幼児から高齢者・障害者まで実際の町のように世代を越えた方々とのコミュニケーションを図ることが可能になった。また、地域通貨たま運営委員会やヨネッティー王禅寺の協力により、余ったユリーを実際の町で使える地域通貨やヨネッティー王禅寺のプール券として交換できる仕組みを作ることができた。これにより子どもたちは自分たちで稼いだお金を無駄にすることなく、実際の社会で使うことができるようになった。表2は、第6回ミニたまゆりの運営組織についてまとめたものである。

表2 第6回ミニたまゆり運営組織

団体名	詳細
ボランティア学生 (203名)	本学の人間福祉学部1年生の必修科目である福祉マインド実践講座の必修ボランティア活動としてミニたまゆりに参加。
ミニたまゆり実行委員会 コアスタッフ (18名)	上記のボランティア学生の中から有志で集まった実行部隊。9月以降毎週会議を行い、計画の立案や子ども会議の準備、司会進行、本番に向けた用意など様々な作業を行う。
大学教職員スタッフ (約50名)	有志で集まった大学教員と事務職員のスタッフ。主に学生のサポートと子どもたちの見守りや予算の管理・物品の購入などの裏方作業を行う。
子ども会議参加児童 (174人) 子ども市長 (10人)	子ども会議に参加をして、町のルールや仕事内容を考えたり、料理を作る練習やお店の接客の練習・看板や飾り付けの作成といった準備を行う。イベント当日は自分が学んだ事を、別の子どもたちに指導する等、子どもたちのリーダーとして活動する。
地域住民ボランティア (84人)	大学周辺に住むボランティアスタッフ（主に高齢者）。イベント当日に、各公共施設（市民登録所・銀行・税務署など）のサポートを行う。
川崎市リサイクルセンター (紙すき)	紙すきの店舗を担当。子どもたちや学生スタッフに紙すきの方法を指導。
社会福祉法人はぐるまの会 (喫茶店)	イベント当日に、はぐるまの会のスタッフと利用者（知的障がい）の皆さんで焼き芋・コーヒー・紅茶の販売を行う。
麻生総合高校 (新聞社・テレビ局)	麻生総合高校の生徒がボランティアとして参加。新聞社とテレビ局で働く子どもたちが撮影した写真やインタビュー記事を麻生高校の生徒がパソコンを使って編集し新聞やテレビ番組を作成する。
地域通貨たま運営委員会 (たま)	ミニたまゆりで余ったユリーを地域通貨「たま」と交換することができる。地域通貨「たま」とは、川崎市多摩区で100たま100円として生花店や飲食店、衣料店など10数店舗で買い物の際に代金の一部を支払うことができたり、各種の特別優待を受けられる。ミニたまゆり2日目に地域通貨たま運営委員会が地域通貨「たま」とユリーを交換できる交換所を設置した。
ヨネッティー王禅寺 (プール券)	ミニたまゆりで余ったユリーは、100ユリー100円としてヨネッティー王禅寺のプール券と交換することができる。ミニたまゆり2日目にユリーとプール券を交換できる交換所を設置した。
川崎市教育委員会	川崎市教育委員会との連協事業として、各小学校との連携等を中心に協力していただいている。

6. 第6回ミニたまゆり店舗について

ミニたまゆりの店舗は「公共」、「製作」、「遊び」、「食事・デザート」、「イベント」の5つにグループ分けを行っている。店舗については子ども会議での子どもたちの意見に基づき様々な店舗を用意している。各グループの詳細な説明と店舗については下記の表にまとめた。

表3 第6回ミニたまゆり店舗

グループ	内容	店舗
公共	町の住民になるための市民登録や職業案内・銀行などの市民の窓口になる施設が用意されている。その他にも、市役所・警察・清掃局など市民の生活を支え、暮らしやすい町を作るための仕事がたくさん用意されている。公共の仕事で支払われる給料は、税務署で集めた税金から支払われている。	市民登録・職業案内・カード返却・銀行・税務署・テレビ局・新聞社・市役所・工務店・清掃局・警察・道案内・図書館
製作	子ども達の力でプラバンやパズル・ミサンガなどの小物を製作する。製作物は隣に併設された販売所で販売される。自分で作成した小物を持って帰る事は出来ないが、販売所で自分の作品をユリーで購入することができる。	紙すき・小物入れ・しおり・パズル・ちぎりえ・エコバック・糸電話・びゅんびゅんゴマ・紙ビーズ・サングラス・ミサンガ・ブーメラン・プラバン・スライム・ネイルサロン・福祉考房・販売店
遊び	色々な遊びが体験できる店舗がそろっている。ゲームなどで遊んだあとは、その得点に応じて駄菓子などの景品がもらえる店舗が多い。射的の鉄砲や輪投げの輪・魚釣りの魚のイラストなど、店舗で必要な部材は、子どもたちが自分の力で用意する。	ヨーヨー釣り・スーパーボールすくい・魚釣り・ボーリング・迷路・モグラたたき・輪投げ・射的・チョコつまみ・的あて・缶つま・ストラックアウト
食事・デザート	子ども達が用意した食事やデザート販売する店舗。衛生面を考え、多くの店舗で、学生食堂で調理済みの食材を子どもが盛り付けし提供している。また、唯一保護者の方も楽しめるお店として喫茶店を用意し、アイスティー、焼き芋を100円で販売した。	フルーツポンチ・綿菓子・飲み物・おにぎり・ポップコーン・たこ焼き・カレー・うどん・中華まん・トン汁・フライドポテト・フランクフルト・焼そば・喫茶店・クレープ・タイ焼き・アイス・ケーキ・ドーナッツ・駄菓子
イベント	食堂に設置されたステージで定期的に行われるゲームや発表会などのイベントです。第6回ミニたまゆりでは新しいイベントとして市議会が開催され、子ども市長など参加した子どもたちから町を良くするための意見が多数寄せられた。その意見の中から、急遽、宝くじのイベントを開催することになり、二日目の午後に宝くじの販売を行った。	音楽演奏・市長選挙・模擬裁判・市議会・手話・紙芝居・じゃんけん大会・クイズ・ビンゴ大会・車いす体験・宝くじ・カラオケ大会

7. ミニたまゆりで流通する地域通貨「ユリー」

ミニたまゆりの町の中で買い物をするには、「ユリー」という単位の地域通貨を利用する。1時間お仕事をすると、銀行で8ユリーの給料が支払われる。その後、銀行の隣にある税務署で税金として4ユリーを納めた後、残った4ユリーを買い物や遊びに使うこ

とができる。

またミニたまゆりの税率は、50%である。参加者のアンケートを見ると、多くの方々から税金が高すぎるとの意見があるが、第1回目から1時間働いて手元に残るお金が4ユリーという金額は一切変えていない。過去のユリーの税率を振り返ると、第1回のミニたまゆりでは、1時間6ユリーと公表していたが、実際に銀行で支払われる金額は2ユリーの税金を差し引いた4ユリーであった（源泉徴収制度）。第2回目では税金を納めるリアルな体験をさせたいという事で、1時間6ユリーを支払い、税務署で33%の税金（2ユリー）を納めるようにしたが、小学校低学年には33%の税金を計算するのが難しく、税務署でのトラブルが発生した。これらのトラブルを解消するために、1時間8ユリーの給与を支払い、その半分を税務署に収めるという今の方法が定着した。

更にユリーのデザインは、子ども会議の参加者から募集したイラストを元に作成している。子ども達の応募作品から、次の3つの作品が選ばれ、これらの作品を元に大学生の実行委員がユリーのデザインを作成した。

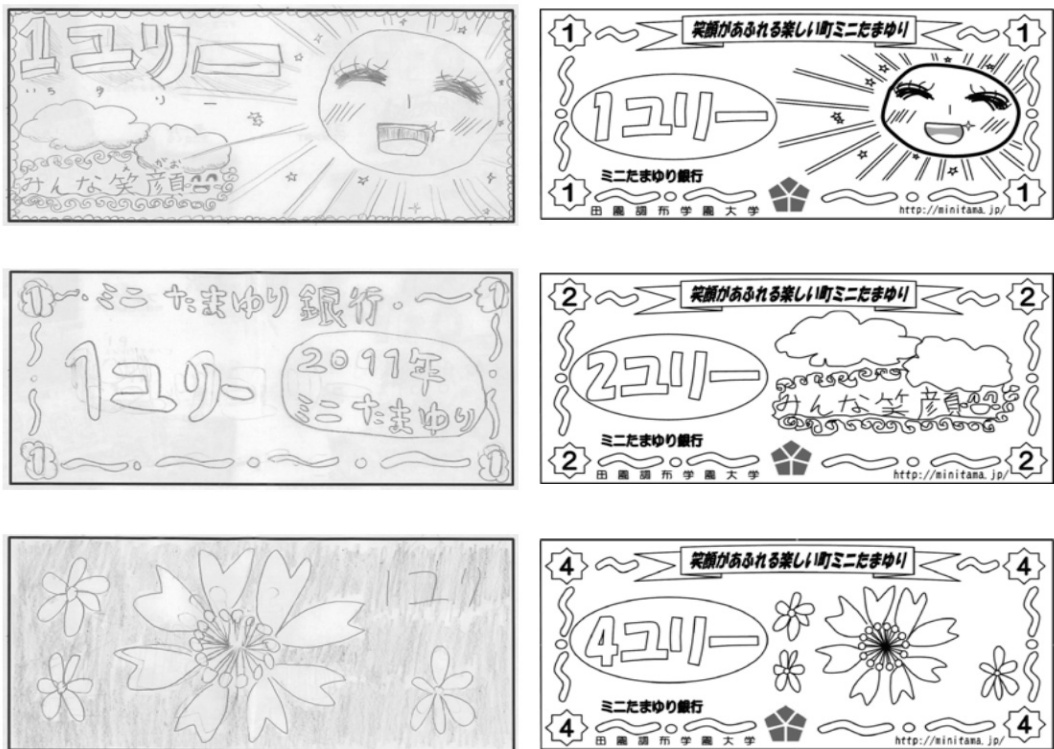


図1 第6回ミニたまゆり ユリーのデザイン

3. 子ども会議について

1. 子ども会議の概要

「ミニたまゆり」の実現に向けて、月に1回のペースで地域の子どもたちを大学に招いて「子ども会議」を開催している。子ども会議では、大学生や地域の大人スタッフが司会者となり、子どもたちと一緒に新しい町のルールやお店を考えたり、料理を作る練習やお店の接客の練習・イベントに必要な看板や飾り付けの作成といった準備を行う。毎回50人以上の子どもたちが参加し、子ども独自の斬新なアイデアを発想してくれる。

子ども会議を通じて、料理や接客の方法を覚えた子どもたちは、キッズリーダーと呼ばれ、「ミニたまゆり」本番では、子どもたちのリーダーとして活躍し、自分たちが考えたルールや学んだ事を、別の子どもたちに指導する。

また子ども会議に参加すると、1日につき4ユリーの報酬が支払われ、イベント当日は一般の児童より1時間早く会場に入る事ができる。これは、キッズリーダーを募集するための報酬という意味のほかに、オープン直後は町にユリーが流通していないので消費者が不在となり、店を開いてもお客が集まらないという問題や、オープン直前の店舗準備のための人材確保という意味を持っている。

2. 子ども会議の効果

毎回の子ども会議の中には必ずワークショップの時間が設けられている。子どもたちに、議題を投げかけグループにわかれ議論し、そこで集まった意見は最後の発表の時間に子どもたちに発表してもらおう。子どもだけの集まりでは活発な意見が得られないが、ファシリテーター役の学生がうまく誘導する事によって、子ども独自の自由な発想が生まれる。

発表会で良い意見が発言された場合、積極的に町の仕組みに取り入れ、次回の子ども会議で町の決定事項として大きく取り上げ、子どもたちに周知する。この経験を繰り返す事で、子ども会議に参加する児童は、自分たちの考えが町づくりに繋がる事を理解し、ミニたまゆりを自分たちの力で作り上げているという実感を得られる。

子ども会議で決定した事項としては、町のキャッチフレーズである「笑顔があふれる楽しい町」やユリーのデザイン、新しい店舗のアイデアなどがある。最後の子ども会議では、市長選挙を行い立候補者の中から10人の児童が子ども市長として選出された。

3. 子ども会議の成果

全5回の子ども会議の総参加人数はのべ345名となり、実際の参加人数174名の内、本番に来場したのが137名で合計1380ユリーの報酬を支払った。参加者のアイデアに

より、町のキャッチフレーズやユリーのデザイン、仕事の種類と内容、町のルールを決めた他に、第5回目ではイベント本番で販売する商品を作成した。その結果、イベント本番ではスムーズに会場をオープンさせ店舗を稼働させる事ができたと考える。また、子ども会議から選出された子ども市長も非常にやる気のある児童が集まっており、本番当日多くのイベントで活躍した。

表4 第6回ミニたまゆり 子ども会議の参加人数

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	総合計	実人数	本番参加者
47人	57人	53人	50人	138人	345人	174人	137人

4. 子ども市長の仕事

子ども会議で選出された子ども市長は、子ども達の代表として様々な仕事に携わる。子ども会議の最終日には、参加者に放映する町のルールの紹介ビデオに出演し、イベント当日も表5の様なスケジュールで活動する。

表5 子ども市長のスケジュール

2月11日(土)		2月12日(日)	
10:00～	開会式・テープカット	10:00～	川崎市長との対談
12:00～	市議会	12:00～	市議会
14:00～	模擬裁判	14:00～	テレビのインタビュー
16:00～	明日の打ち合わせ	16:00～	閉会式



図2 子ども市長の仕事風景（開会式と阿部市長との対談）

また市議会では、子ども市長や一般の参加者と共に、「笑顔があふれる楽しい町」というキャッチフレーズをヒントにして「子どもの町を笑顔でいっぱいにするには、どうすればいいか？」という議題で、話し合いを行った。はじめは中々意見が出なかったが、司会者が「みんなはどんなときに笑顔になるのかな？」と問いかけたところ、「ほめられ

たとき」「お礼を言われたとき」「ユリーをもらえたとき」「おいしいものを食べたとき」など、活発に意見が発言されるようになり、最終的に次のような公約が決まった。

- ・「ありがとう」をたくさん言おう。
- ・良い事を見かけたらたくさんほめてあげよう。
- ・おいしいお店を見つけたらみんなに教えてあげよう。
- ・宝くじの開催（13日11時 販売開始）。
- ・まちをきれいにしよう。ゴミをすてないで！
- ・いじめ、仲間外れをしない。
- ・人のものを盗まない。

この結果、急遽二日目に宝くじのイベントが開催される事になり、当選者にユリーが贈呈された。

更に川崎市の阿部市長との対談では、子ども市長が作成した町の公約を阿部市長に披露して感想を伺ったり、子ども市長の質問に答えていただいた。

「市長は普段どんな仕事をしてるんですか？」という質問に、「市民のために、お金を何に使ったら良いか考えたり、町の問題を解決する方法を考えたりしています。何かあったら市を代表して人に謝るのも市長の仕事かな」と答えてくださった。「阿部市長は、来年のミニたまゆりにも来てくれますか？」という質問には、「もちろん、来年も来ますよ」と答えていただいた。

その後、子ども市長の案内で子どもの町を視察した阿部市長は、職業案内所で綿菓子の仕事カードを受け取り、綿菓子作りの仕事を体験した。会場の移動中に、新聞社の子ども記者からインタビューの申し出があったが、そのインタビューの内容が、急いで編集され、最新号の新聞がお土産として市長にプレゼントされた。

4 「ミニたまゆり」の目標設定

1. ミニたまゆりの目的

「ミニたまゆり」の目的は、参加する子どもたちや学生スタッフへの教育活動としての活動は勿論の事、大学の使命である「教育」、「研究」、「社会貢献」の3つの使命の内、大学の社会貢献を目的として取り組んでいる。更には、田調大のような小規模大学にとってミニたまゆりの活動は他大学には無い特色ある活動だといえる。この特色と活かして地域に大学をPRするためのツールとしての目的もある。

表6 「ミニたまゆり」の目的

① 学生への教育
② 参加児童への教育
③ 大学の社会貢献活動
④ 大学のPR活動

上記の4つの目標を具体的に解説すると「①学生への教育目標」と「②参加児童への教育」については下記の「2. 学生への教育目標」と「3. 参加児童への教育目標」を参照していただきたい。次に「③大学の社会貢献活動」とは、先にも述べたように大学には「教育」「研究」「社会貢献」の3つの使命を掲げている。ミニたまゆりの活動は、大学を中心として地域の子どもたちや保護者、高齢者、障害者、地域の企業や行政と連携し、大学の知や人材を有効活用し、地域と共に作り上げるイベントであり社会貢献活動の一環として取り組んでいる。最後の「④大学のPR活動」とは、大学間の競争が激しくなる昨今、田調大のような新設小規模大学が生き残るためには、何か特色ある教育プログラムが必要不可欠である。「6. 大学のPR効果」で詳しく解説するが、ミニたまゆりはイベント当日に川崎市長や神奈川県知事が視察に訪れたり、ローカルテレビ局の取材や新聞、ラジオ、雑誌等多くのメディアにも取り上げられている。また第5回大学人サミットながさきカレッジにおいても全国の大学教職員から高い評価を頂いたりしている。地域住民からも「ミニたまゆりをやっている大学」としての認知も高く、ミニたまゆりを通じた大学のPR活動も目的としている。

2. 学生への教育目標

ミニたまゆりの目的にある「①学生への教育目標」については、より具体的な教育目標を掲げている。「ミニたまゆり」を単に机上で企画したりするだけではなく、こども会議や当日の運営などの実践を通して学生同士や教職員を始めとして、地域の子どもたちや大人たちとコミュニケーションを図り、様々な困難を乗り越えながら、ミニたまゆりの活動に取り組むことにより、大学の講義では得ることができない様々な教育効果が得られると考えている。具体的な、学生への教育目標として、表7の4つの目標を掲げる。

表7 学生への教育目標

① プロジェクトマネジメントの育成
② コミュニケーション能力の育成
③ 自信力の育成
④ 福祉マインドの育成

上記の4つの目標を具体的に解説すると、「①プロジェクトマネジメントの育成」とは、企画運営するための目的（plan）を立て、実行（Do）し、評価（check）し、改善（Act）のPDCAサイクルを学生に体感させる。同時に学生に企画運営のためのリスクをマネジメントする能力を育成することを目標としている。次に「②コミュニケーション能力の育成」とは、学生同士は勿論、教職員や子どもたち、子どもの保護者等との連携や仲間作りなど立場や価値観の異なる人達との異世代交流を通じて、コミュニケーション能力を育成することを目標としている。次に「③自信力の育成」とは、学生たちが自らの力でイベントを0から企画を立て、実践し、子どもや保護者から感謝される喜び、イベントを成功させたという喜びを体感することで自分自身に自信をもてるようにすることを目標としている。最後の「④福祉マインドの育成」とは、地域貢献活動への参加を通じて、「地域社会に深く根ざした大学」に通う学生としての自覚と責任感を持ち、さらには「他者との連帯」や「我欲・利己を捨てて奉仕する心」といった、福祉を学ぶ者としての重要な資質を早期に身につけることを目標としている。

3. 参加児童への教育目標

ミニたまゆりの目的にある「②参加児童への教育」については、より具体的な子どもへの教育目標を掲げている。子どものまちの主役である子どもたちに対して、「ミニたまゆり」を単に遊ぶだけに止めることなく、遊びを通して「働く」「創る」「学ぶ」の体感を通じたキャリア教育としてのねらいとする意図がある。子どもたちの教育目標は表8のとおりである。

表8 参加児童への教育目標

① 労働体験を通じた職業観の育成
② コミュニケーション能力の育成
③ 地域通貨による経済的気づき
④ 考える力、行動する力の育成

上記の4つの目標を具体的に解説すると、「①労働体験を通じた職業観の育成」とは、子どもたちが子ども会議を通じて町のお店を決め、お店のルールやマニュアルを作成し、イベント当日お店の従業員として働く。この経験を通じ子どもたちの職業観を育成することを目標としている。次に「コミュニケーション能力の育成」とは、ミニたまゆりには学年も違えば小学校も違う子どもたちが参加している。子どもたちはミニたまゆりを通じて、こうした学年や学校が違う子どもたち同士は勿論、学生スタッフの大学生やボランティアの地域住民等、世代や立場を越えたコミュニケーションを通じて、コミュニケーション能力を育成することを目標としている。次に「③地域通貨による経済的気づ

き」とは、地域通過「ユリー」を稼ぐ事の大変さや稼いだお金を消費することの意味や税金を納めるという義務を通じて、子どもたちはお金の尊さを学ぶことを目標としている。最後の「④考える力、行動する力の育成」とは、町のルールや町のコンセプトを決めたり、町を良くするために市議会を開催したりと、ミニたまゆりに参加すると子どもたちは自ら考えて、行動しなくては町の住民として楽しむことができない。ミニたまゆりの取組を通じて子どもたちには自ら考える力、そして行動する力を身に付けてほしいと考えている。

これらの目標に対してミニたまゆりの活動が、どのような効果をあげたのか検証するために、第6回のイベントで収集したアンケート結果を元に次章にて考察を行う。

5. 参加者へのアンケート調査

1. 第6回「ミニたまゆり」学生アンケート調査結果

第6回「ミニたまゆり」に参加した学生203人に対してアンケート調査を行った。アンケート方法はイベント終了後の出席確認作業としてアンケート用紙を配布し記名式で記述を行った。「ミニたまゆりについて、良かった点を教えてください（複数回答可）」という設問の結果を表9に示す。集計の結果、「子どもたちに接することができた」が179人（88%）と圧倒的に多く、次に、「充実感を味わえた」の66人（33%）と「他の学科・専攻の人と仲良くなれた」が65人（32%）と比較的高い数値を出している。子どもたちとの交流や他学科の学生同士との交流を通じて、学生の教育目標に掲げている「②コミュニケーション能力の育成」に対して幾ばくかの効果があったと考えられる。実際学生からの自由記述には、「子どもたちとたくさん話、楽しく仕事をするように心がけた」「昨日来た子がまた来てくれて、覚えてくれていたのが、嬉しかった」「言葉を十分気を付けて、子どもの視線に立った対応をした」「子ども達とは友達のように接することで安心感を出せた」などの感想が聞かれた。

表9 2010年度 第6回「ミニたまゆり」学生アンケート結果 (N=203)
「ミニたまゆり」について良かった点（複数回答可）

選択肢	回答数	割合
子どもたちに接することができた	179	88%
企画や運営の実践を学べた	38	19%
充実感を味わえた	66	33%
やり遂げたことで自信がついた	45	22%
他の学科・専攻の人と仲良くなれた	65	32%
教職員との交流が深まった	35	17%
地域PCクラブや地域の人たちと交流できた	22	11%

比較的数値の低かった項目として、「地域 PC クラブや地域の人たちと交流できた」22人（11%）や「教職員との交流が深まった」35人（17%）、「企画や運営の実践を学べた」38人（19%）などが目立つ。特に「企画や運営の実践を学べた」については、学生への教育目標に掲げている「プロジェクトマネジメントの育成」に深く関係する項目であるため残念な結果となった。しかし、203名の参加学生の多くが、子ども会議とイベント本番にそれぞれ1回しか参加しておらず、イベントの企画運営のプロセスを体感しているとは言い難い状況であり、この数値も当然の結果といえる。しかし、イベントの企画運営を中核で担っていた18名のコアスタッフのアンケートのみを選別し集計した結果（表10）を見ると、他の項目は全体の集計結果と同様な傾向にあるが「企画や運営の実践を学べた」に関する項目のみ50%と高い数値を得ることができた。

表10 2010年度 コアスタッフ学生へのアンケート結果（N=18）
「ミニたまゆり」について良かった点（複数回答可）

選択肢	回答数	割合
子どもたちに接することができた	16	89%
企画や運営の実践を学べた	9	50%
充実感を味わえた	6	33%
やり遂げたことで自信がついた	4	22%
他の学科・専攻の人と仲良くなれた	7	39%
教職員との交流が深まった	6	33%
地域 PC クラブや地域の人たちと交流できた	4	22%

学生への教育目標に掲げている「③自信力の育成」については、アンケート結果の「やり遂げたことで自信がついた」が45人（22%）と低い数値になっている事から、筆者らが予想していたような効果があげられていない事がわかる。自由記述の項目を見ると、イベントへの準備不足、情報の伝達不足、運営スタッフの人数不足などから、イベントへの完成度に対して学生からの不満の声が多く寄せられており、イベントの完成度の低さが参加学生の満足度の向上・自信力の育成に寄与しなかった事が予想される。

2. 第6回「ミニたまゆり」保護者アンケート調査結果

第6回の「ミニたまゆり」に参加した保護者に対してミニたまゆりに対してアンケート調査を行った。アンケート方法は、ミニたまゆりの「市役所」の仕事の1つとしてアンケート集計を用意し、子ども達が、食堂で待機している保護者に対してアンケートをお願いするという形で実施している。86人の保護者からのアンケート結果は表11のとおりである。

アンケート結果から、「子どもたちが就業体験できる」が76人（88%）、次に「子どもが社会の仕組みを学べる」が66人（77%）であり、参加児童への教育目標である①

労働体験を通じた職業観の育成について、一定の効果があつたと考えられる。また、「子どもが色々な人と交流ができる」についても、36人（42%）と比較的に高い結果となっており、②コミュニケーション能力の育成についても効果があつたと考えられる。

表 11 2010 年度 第 6 回「ミニたまゆり」保護者アンケート結果 (N=86)
「ミニたまゆり」について良かった点 (複数回答可)

選択肢	回答数	割合
子どもが就業体験できる	70	81%
子どもが社会の仕組みを学べる	66	77%
子どもが色々な人と交流ができる	36	42%
子どもの頑張っている姿を見られる	36	42%
保護者同士が交流できる	3	3%
地域にある大学を知ることができる	23	27%
気分転換や休息ができる	5	5%
家族の会話が増える	7	8%

また、自由記述には、「このようなイベントを企画することがすごいと思います。学生の皆さんありがとうございました。」「たくさんの店舗に職業、準備が大変だったと思います。子どもたちはどの子も一生懸命仕事を頑張り、良い表情でした。楽しそうな様子も見れ、本当に親も楽しめました。」といった、イベントに対する肯定的な意見が寄せられていた。事実、「来年のミニたまゆりにも参加したいですか?」というアンケート結果は、86人中84人（98%）が来年も参加したいと回答しており、参加者のイベントに対する満足度が高い事がうかがえる。総学生数1200人の小規模大学において、2000人の参加者を集める本イベントと前述の参加者の満足度を考慮すると、ミニたまゆりの目的の一つである、「③大学の社会貢献活動」については十分目的を達成できていると考えられる。

自由記述に書かれていた否定的な意見として、「税率が50%というのは高すぎる」、「開会直後は町に子どもが少なく、商売にならない」などの意見が寄せられていましたが、これは町の生活を通じて、商品を販売する、税金を納めるという体験により初めて抱く不満であり、参加児童の教育目標の「③地域通貨による経済的気づき」に密接に関係するものと考えられる。

6. 大学のPR効果について

1. ミニたまゆりの広報活動

子ども会議やミニたまゆり本番の参加者の集客方法として、地域の小学校へのチラシの配布を行っている。ミニたまゆりは、川崎市教育委員会との連携事業として運営されており教育委員会を通じて、麻生区・宮前区の小中学校へのチラシ配布の許可を得てい

る。その効果は絶大で、イベントの3週間前に14,000枚のチラシを配布することにより、2000人の参加者を集めている。

その他の広報活動として、かわさきFMへのラジオ出演による告知や市政だよりなどの発行物への掲載。イベント初日には、地元新聞やケーブルテレビ局の取材を受け、その日の夕方のニュース番組や翌日の朝刊にイベントの告知が掲載された。第6回のミニたまゆりでは、テレビ神奈川の1日密着取材を受けることになり、後日、夕方のニュース番組にて9分間の特集が放映されることになった。

これらの広報活動やミニたまゆりの活動を通じて、田園調布学園大学のミニたまゆりというイベントの地域住民への認知度が向上しており、開催回数を重ねるに従い、保護者や地域住民の方々から、「今年もミニたまゆりを楽しみにしていた」「年に1回ではなく、毎月開催して欲しい」「第1回目から6年連続で来ています」などミニたまゆりに対するポジティブな感想が数多く聞かれるようになってきている。また、保護者の感想として、「子どもの頑張る姿に驚きました」「仕事やお金の大切さを理解してくれたようです」といった子どもの成長を感じる感想がありミニたまゆりの活動が、地域の人々に良いイメージで受け入れられている事がわかる。

2. 学外からのミニたまゆりに対する評価

ミニたまゆりは地域の参加者からの評価以外に、次のような媒体から評価を得ている。

- ・国土社発行の書籍『地域で遊んで学ぶ、キャリア教育』
第1回～3回のミニたまゆりの活動をまとめた書籍
- ・萌文社発行の書籍『こどもがまちをつくる「遊びの都市（まち）-ミニ・ミュンヘン」からのひろがり』
全国の子どもの町を紹介した書籍。川崎市のイベントとしてミニたまゆりが紹介
- ・日本経済新聞社発行の日経グローバル第161号『大学の地域貢献度ランキング』
「一押し地域貢献プロジェクト」にて、ミニたまゆりの活動が調査大学333校の中から上位6校に選ばれる。
- ・第5回大学人サミット『大学自慢コンテスト』
長崎大学で開催された、大学自慢コンテストにて12校の参加大学の中から総合2位を受賞

3. 大学人サミットにおける受賞について

平成 23 年 11 月 12 日（土）～ 11 月 13 日（土）に国立大学法人長崎大学文教キャンパスで「第 5 回大学人サミットながさきカレッジ」が開催された。これまでに第 1 回山形大学、第 2 回山口大学、第 3 回芝浦工業大学、第 4 回山梨学院大学と計 4 回に渡り全国各地で開催されてきた。大学の教職員と学生からなる「大学人」が創り上げる、「大学人のための」自己表現の場として、また国公立の枠や立場や世代を越えて共に語り合える場であり、ヒューマンネットワークを築く場として重要な役割を果たしてきた。

大学人サミットのプログラムに「大学自慢コンテスト」という企画がある。この企画の趣旨は、大学人が自らの大学の良い所を自慢することで、改めて大学の良さを知ることによって大学を好きになることにある。大学自慢コンテストへの出場大学は、発表順に福岡教育大学・田園調布学園大学・新潟大学・長崎大学・青森公立大学・活水女子大学・熊本学園大学長崎ウエスレヤン大学・大分大学・山口県立大学・弘前大学・長崎県立大学の 12 大学。各大学制限時間 9 分間で大学の自慢についてプレゼンテーションを行う。審査方法は、会場にいる約 100 名の参加者全員が「ほめるシート」で発表の評価を行う。評価項目は次の 5 項目である。また、「ほめるシート」には各大学への一言メッセージを書くスペースと特に印象に残ったフレーズを 3 大学まで書けるスペースがある。

表 12 大学自慢コンテスト「ほめるシート」評価項目

1. 学生・キャンパスをイメージできました
2. 愛校心が伝わりました
3. 仕事や自分の生活に活かしたいヒントももらいました
4. この大学で働いてみたい・学びたいと思いました
5. 大学自慢に感動しました



大学自慢 その1

みんないい子！

- 学生・教職員が気持ちよく「挨拶」をする大学
- 多くの学生が、社会に貢献したい、人々の役に立ちたいと考え福祉や保育を志す。
- 学生に将来の夢を聞いてみると・・・



在学中から、多くの学生が、自発的に地域に貢献しています

図 3 大学人サミットにおける大学自慢コンテストの様子

どの大学も個性あふれる熱い想いがこもった素晴らしい発表ばかりであったが、その中で、田調大の発表は、「地域の人々から愛される田園調布学園大学」というテーマで田調大の学生による地域貢献活動の紹介やミニたまゆりの紹介などを中心に「学生は本学にとって宝である！！」と胸を張って発表し総合2位の評価を獲得した。総合1位は長崎ウエスレアン大学、3位は開催大学である長崎大学であった。1位との獲得票数差は4票であった。

評価シートのコメント欄には、「大学が地域の中心になっている事例がある事にビックリした」「ミニたまゆりという具体的な地域貢献の例をあげており、大学の強み特徴が良く分かった」「このような学生たちが、しっかり社会を支えてくれるようになると子どもが生きやすい社会になってくれると思う。」「学生は大学の宝です。素敵な言葉でした。内容がまとめられていて分かりやすかったです。」「ミニたまゆりは素晴らしい企画であると感じました。愛校心がビシビシ伝わってきた。」などの意見が寄せられており、ミニたまゆりという田調大の特色ある活動が他大学からも評価されている事がわかる。

更に、特に印象に残ったフレーズの記入欄では、記入欄が3大学と限られているにもかかわらず参加者の約40%が田調大についてコメントを書いた。

7. さいごに

ミニたまゆりの活動は、今年度で6回目となる。参加者からのアンケートに目を通すと回を重ねるごとに不満・改善点の意見が減り、喜びや感謝の言葉が増えていることがわかる。事実、今年度の保護者へのアンケートでは、98%の方が来年度のミニたまゆりも参加したいと回答していただいている。また、テレビや新聞などの媒体にミニたまゆりの活動が紹介される回数も増えており、田調大の特徴的な取り組みとして地域から認知されるようになった。これだけ多くの地域住民の方に喜ばれ、認知されるイベントに成長したミニたまゆりは、4章で紹介したミニたまゆりの目的である、「③大学の社会貢献活動」と「④大学のPR活動」の2点に関して、十分にその目的を達成していると筆者らは評価している。

ミニたまゆりの目標の1つである「②参加児童への教育」については、アンケートの結果から「①労働体験を通じた職業観の育成」「②コミュニケーション能力の育成」「③地域通貨による経済的気づき」については、ある程度の効果があったと筆者らは評価しているが、「④考える力、行動する力」の育成に関しては、それを裏付けるデータを得ることができなかった。また、これらのデータは、児童向けのアンケート収集が実質的に機能しなかったため、保護者向けのアンケート結果からの推測となっている。さらに、

今年度の反省点として5回開催した子ども会議への参加者が回を重ねるに従い減少していった事があげられる。これは、子ども会議の内容が、子ども達にとって魅力的ではない（楽しくない）事を意味していると認識している。子どものモチベーションは楽しみであり、それを無視したイベントづくりでは、子ども達の賛同を得られない。これを踏まえて次年度の子ども会議では学びの要素のほかに、楽しみの要素を考慮しながらプログラムを構築していく予定であり、町づくりに積極的に参加している児童からアンケート集計を行うことにより、「④考える力、行動する力」の育成についての効果を測定したいと考えている。

最後の目標となる、「①学生への教育」については、多くの子どもや保護者と触れ合いを通じて「②コミュニケーション能力の育成」に関して一定の効果があったと考えられるが、それ以外の項目で高い効果をあげられたとは言い難い結果になっている。その原因として、「ミニたまゆりに関わる時間が短い事」「作業内容の説明不足」が考えられる。第6回のイベントでは、学生の負担を均一化し負担を軽減させるために、203人の参加者に、2日のイベント本番のどちらかと5回開催される子ども会議のいずれか、各1日参加するように義務付けられていた。多くの学生が、事前に簡単なレクチャーを受けただけでイベントに参加する事になり、ミニたまゆりの趣旨を理解しないままイベントが終了したようである。事実、イベント運営に深く関わっているコアスタッフのみを抽出したアンケート集計では、「①プロジェクトマネジメントの育成」に関わる項目で高い数値を記録している。今回の反省点を踏まえて、次年度のミニたまゆりではより多くの学生がミニたまゆりの運営に深く関われるよう運営体制を改善していくとともに、より詳細な教育効果を測定するためのアンケート集計、ヒヤリング調査を実施したいと考えている。

謝辞

ミニたまゆりの活動を実現するために、実行委員・大学スタッフ・地域の協力者など、多くの方々の協力を得てきました。ミニたまゆりの活動が今日のように成長したのも、これら協力者の活動の成果です。最後になりましたが、ご尽力をいただいた皆様に心より感謝申し上げます。

引用（参考）文献

文部科学省,2010,『学校基本調査報告書』文部科学省

(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm, 2011.11.24).

中央教育審議会, 2005, 『我が国の高等教育の将来像』

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm, 2011.11.24).

田園調布学園大学, 2011, 『田園調布学園大学公式ホームページ』(<http://www.dcu.ac.jp/>, 2011.11.24).

田園調布学園大学, 2010, 『平成 21 年度自己点検・評価報告書』

(<http://www.dcu.ac.jp/pages/21jikotenken.pdf>, 2011.11.24).』.

ミニたまゆり実行委員会, 『第 6 回子どもがつくる町 ミニたまゆり 2011 報告書』.

ミニたまゆり公式 HP, ([http://minitama.jp/.](http://minitama.jp/), 2011.11.24)

日本経済新聞社産業地域研究所, 「一押しプロジェクト～交流、イベントから健康、環境まで」『日経グローバル』
No.161., 2010.12.6, 29

酒井一郎・番匠一雅, 2008, 『こどものまちで働こう 地域で遊んで学ぶ, キャリア教育』国土社.

木下 勇, みえ けんぞう, 卯月 盛夫, 2010, 『こどもがまちをつくる「遊びの都市(まち) - ミニ・ミュンヘン」からの
ひろがり』萌文社.

人材育成学会, 2011.12.18, 『人材育成学会 第 9 回年次大会論文集』27-35

大学職員サミットとうきょう・しばうらカレッジ 2009 実行委員会, 2010, 『大学職員サミットとうきょう・しばうらカレ
ジ 2009 報告書』

河地和子, 2005, 『自信力が学生を変える 大学生意識調査からの提言』平凡社新書